

日蓮大聖人御書全集

まつのだのごへんじ

松野殿御返事

じゅうしひぼう こと

（十四誹謗の事）

新版
1986
〜
1994

まつのどのごへんじ　じゅうしひぼう　こと

松野殿御返事（十四誹謗の事）

けんじ　ねん　がつ　にち

建治2年（'76）12月9日

さい　まつののろくろうぎえもん

55歳　松野六郎左衛門

がもくひとゆい　はくまいいちだ　しろこそでひと　おく　た　お

鵝目一結・白米一駄・白小袖一つ、送り給ひ畢わんぬ。

やま　もう　みなみ　のやままんまん　ひやくより

そもそも、この山と申すは、南は野山漫々として百余里

およ　きた　みのべさんたか　そばだ　しらね　たけ　にし

に及べり。北は身延山高く峙つて白根が岳につづき、西に

しちめん　もう　やま　がが　はくせつた　ひと　す　かいちう

は七面と申す山、峨々として白雪絶えず、人の住み家一字も

と　来　こずえ　つた　えんこう

なし。たまたま問いくるものとしては、梢を伝う猿猴なれば、

すこ　とど　かえ　いそ　うら　ひがし　ふ

少しも留まることなく、還るさ急ぐ恨みなるかな。東は富

じ　かわみなぎ　りゆうさ　なみ　こと　ところ　とぶら

士河漲つて流沙の浪に異ならず。かかる所なれば、訪う

ひと まれ

たびたびおとずれ

たも

ふしぎ

人も希なるに、かように度々音信せさせ給うこと、不思議の

なか ふしぎ

中の不思議なり。

じつそうじ がくと

にちげん

にちれん

きぶく

しよりよう

す

実相寺の学徒・日源は、日蓮に帰伏して、所領を捨て、

でしだんな はな

おわ

わ み

お どころ

弟子檀那に放され御座しまして、我が身だにも置き処なき

よしうけたまわ そうろう

にちれん

とぶら

しゆそう

あわ

たも

由承り候に、日蓮を訪い、衆僧を哀れみさせ給うこ

まこと どうしん

しようにん

か ひと

むそう

かくしよう

と、誠の道心なり、聖人なり。すでに彼の人は無双の学生

みようもんみようり

す

それがし

でし

な

ぞかし。しかるに、名聞名利を捨てて某が弟子と成つて、

わ み

がふあいしんみよう

しゆぎよう

いた

ほとけ

ごおん

ほう

我が身には我不愛身命の修行を致し、仏の御恩を報ぜんと

めんめん

きようけもう

くようとう

ささ

たも

面々までも教化申し、かくのごとく供養等まで捧げしめ給う

ふしぎ

こと、不思議なり。

まつせ

くけん

そうに

ごうじゃ

ほとけ

と

「末世には、狗犬の僧尼は恒沙のごとし」と仏は説かせ

たま

そうろう

もん

こころ

まつせ

そう

びくに

みようもんみようり

給いて候なり。文の意は、末世の僧・比丘尼は、名聞名利

じゃく

うえ

けさごろも

き

かたち

そう

びくに

に

に著し、上には袈裟衣を着たれば形は僧・比丘尼に似た

ないしん

じゃけん

つるぎ

ひつさ

わ

でい

だんな

れども、内心には邪見の剣を提げて、我が出入りする檀那

もと

よ

そうに

寄

むりよう

ざんげん

いた

よ

そうに

の所へ余の僧尼をよせじと無量の讒言を致し、余の僧尼を

よ

だんな

お

たと

いぬ

さき

ひと

いえ

寄せずして檀那を惜しまんこと、譬えば犬が前に人の家に

いた

もの

え

く

のち

いぬ

きた

み

唾

吠

至つて物を得て食らうが、後に犬の来るを見ていがみほえ、

く

あ

こころ

食い合うがごとくなるべしという心なり。かくのごときの

そうに みなみな あくどう

だ

がくと にちげん

がくしよう

僧尼は、皆々、悪道に墮すべきなり。この学徒・日源は、学生

もん

み

たま

こと

ほか

そうしゅ

とぶら

なればこの文をや見させ給いけん、殊の外に僧衆を訪い

かえり たも

まこと

あ

がた

おほ

そうろう

顧み給うこと、誠に有り難く覚え候。

おんふみ

い

きよう

たも

もう

のち

たいてん

御文に云わく「この経を持ち申して後、退転なく

じゆうによぜ

じ がげ

よ

たてまつ

だいもく

とな

もう

そうろう

十如是・自我偈を読み奉り、題目を唱え申し候なり。

しょうにん

とな

たも

だいもく

くどく

われ

とな

もう

ただし、聖人の唱えさせ給う題目の功德と、我らが唱え申す

だいもく

くどく

ほど

たしょうそうろう

うんぬん

題目の功德と、いか程の多少候べきや」と云々。さらに

しょうれつ

そうろう

勝劣あるべからず候。

ゆえ

ぐしや

も

こがね

ちしや

も

こがね

その故は、愚者の持ちたる金も智者の持ちたる金も、

ぐしや　とも　ひ　ちしや　とも　ひ　さべつ

愚者の然せる火も智者の然せる火も、その差別なきなり。た

きよう　ころ　そむ　とな　さべつあ

だし、この経の心に背いて唱えば、その差別有るべきな

り。

きよう　しゆぎよう　じゆうじゆう　品　おおむね　もう

この経の修行に重々のしなあり。その大概を申さば、

き　ご　い　あく　かず　あ　いま　もん　せつ　ふせつ

記の五に云わく「悪の数を明かすとは、今の文には説・不説

い　ひと　わ　い　さき　あくいん　つら

を云うのみ。ある人これを分かちて云わく、先に悪因を列ね、

つぎ　あつか　つら　あくいん　じゆうし　いち　きようまん　に　けたい　さん

次に悪果を列ぬ。悪因に十四あり。一に憍慢、二に懈怠、三

け　が　し　せんしき　ご　じゃくよく　ろく　ふげ　しち　ふしん　はち　ひんしゆく

に計我、四に浅識、五に著欲、六に不解、七に不信、八に顰蹙、

く　ぎわく　じゆう　ひぼう　じゆういち　きようぜん　じゆうに　ぞうぜん　じゆうさん

九に疑惑、十に誹謗、十一に輕善、十二に憎善、十三に

嫉善しつぜん、十四じゅうしに恨善こんぜんなり。この十四じゅうし誹謗ひぼうは在家ざいけ・出家しゅつけに亘わたる

べし。おそ恐るべし、おそ恐るべし。

過去かこの不輕菩薩ふきようぼさつは、一切衆生いつさいしゅじように仏性ぶつしようあり。法華經ほけきようを持て

ば必ず成仏じようぶつすべし。彼かれを輕んじては仏かろを輕んずるになる

べし」とて、礼拝らいはいの行ぎようをば立てさせ給たまいしなり。法華經ほけきようを持

たざる者ものをさえ、「もし持ちやせんずらん、仏性たもあり」とて、

かくのごとく礼拝らいはいし給たまう。いかにいわんや、持てる在家たも・出家ざいけ

の者ものをや。この經きようの四しの卷まきには「もしは在家ざいけにてもあれ、

出家しゅつけにてもあれ、法華經ほけきようを持ち説く者たもを一言いちごんにても毀そしること

つみおほ

しやかぶつ

いつこう

あいだただ

そし

たてまつ

あらば、その罪多きこと、釈迦仏を一劫の間直ちに毀り奉

つみ

すぐ

み

じつ

る罪には勝れたり」と見えたり。あるいは「もしは実にもあ

ふじつ

と

れ、もしは不実にもあれ」とも説かれたり。

おも

わす

ほけきよう

たも

もの

これをもつてこれを思うに、忘れても法華經を持つ者をば

たが

そし

ゆえ

ほけきよう

たも

もの

かなら

互いに毀るべからざるか。その故は、法華經を持つ者は必ず

みなほとけ

ほとけ

そし

つみ

う

皆仏なり、仏を毀つては罪を得るなり。

こころえ

とな

だいもく

くどく

しやくそん

おんくどく

かように心得て唱うる題目の功德は、釈尊の御功德と

ひと

しやく

い

あび

えしやう

まつた

ごくしやう

等しかるべし。釈に云わく「阿鼻の依正は全く極聖の

じしん

しよ

びる

しんど

ぼんげ

いちねん

こ

うんぬん

じゆうし

自身に処し、毘盧の身土は凡下の一念を逾えず」云々。十四

ひぼう　こころ　もん　まか　すいりよう
誹謗の心は文に任せて推量あるべし。

ほうもん　おんたず　そうろう　まこと　ごせ　ねが　たも
かように法門を御尋ね候こと、誠に後世を願わせ給う

ひと　よ　ほう　き　もの　ひと　かた
人か。「能くこの法を聴く者、この人もまた難し」とて、こ

きよう　まさ　ほとけ　おんつか　よ　い　ほとけ　ごほんい
の経は正しき仏の御使い世に出でずんば、仏の御本意の

と　かた　うえ　きよう　謂　と　たず
ごとく説くこと難き上、この経のいわれを問い尋ねて、

ふしん　あき　よ　しん　もの　かた　み　そうろう
不審を明らめ、能く信ずる者、難かるべしと見えて候。

いや　もの　すこ　われ　すぐ　ちえ　ひと
いかに賤しき者なりとも少し我より勝れて智慧ある人に

きよう　謂　と　たず　たも　あくせ
は、この経のいわれを問い尋ね給うべし。しかるに、悪世の

しゆじよう　がまん　へんしゆう　みようもん　みようり　じやく　かれ　でし　な
衆生は我慢偏執・名聞名利に著して「彼が弟子と成る

べきか、彼に物を習わば、人にや賤しく思われんずらん」

ふだん かれ もの なら あくねん ひと いや おも じゆう み あくどう そうろう だ

と不断に悪念に住して悪道に墮すべしと見えて候。

ほっしほん はちじゆうおくこう ひとあ あいだ むりよう たから つ

法師品には「人有つて八十億劫の間、無量の宝を尽くし

ほとけ くよう たてまつ くどく ほけきよう と そう

て仏を供養し奉らん功德よりも、法華經を説かん僧を

くよう のち しゆゆ あいだ きよう ほうもん ちようもん

供養して、後に須臾の間もこの經の法門を聴聞すること

われおお りやき くどく う よろこ

あらば、我大いなる利益・功德を得べしと悦ぶべし」と見

むち もの きよう と もの つか くどく 得

えたり。無智の者は、この經を説く者に使われて功德をうべ

きちく ほけきよう いちげいつく と もの

し。いかなる鬼畜なりとも法華經の一偈一句をも説かん者を

まさ た とお むか まさ ほとけ うやま

ば「当に起つて遠く迎うべきこと、当に仏を敬うがごとく

すべし」の道理なれば、どうり 仏のごとく互いに敬うべし。ほとけ 例せ

ば、ほうとうほん 宝塔品の時の釈迦・多宝のごとくなるべし。とき

さんみぼう この三位房は下劣の者なれども、げれつ 少分も法華經の法門を

もう 申す者なれば、もの 仏のごとく敬って法門を御尋ねあるべし。ほとけ

「法に依って人に依らざれ」、これを思うべし。ほう

されば、むかしひと 昔独りの人有って雪山と申す山に住み給いき。ひとあ

その名を雪山童子という。な 蕨をおり、せつせんどうじ 菓を拾って命をつ

ぎ、しか 鹿の皮を着物とこしらえ肌をかくし、かわ 閑かに道を行じ

たま 給いき。

せつせんどうじ 思

せけん かん

この雪山童子おもわれけるは、「つらつら世間を觀ずるに、

しょうじむじよう ことわり

しょう もの かなら し

う

生死無常の理なれば、生ずる者は必ず死す。されば、憂

よ なか 徒 果 無

たと でんこう

あさつゆ

き世の中のあだはかなきこと、譬えば電光のごとく、朝露の

ひ む き

に

かぜ まえ ともしび

き

日に向かつて消ゆるに似たり。風の前の灯の消えやすく、

ばしよう は やぶ

こと

ひとみな

むじよう

のが

芭蕉の葉の破れやすきに異ならず。人皆この無常を遁れず。

つい いちど こうせん

たび

おもむ

めいど

たび

おも

終に一度は黄泉の旅に趣くべし。しかれば、冥途の旅を思

あんあん

暗

にちがつ

しょうしゆく

ひかり

うに、闇々としてくらければ、日月・星宿の光もなく、

とうしよく

点

ひ

くら

みち

せめて灯燭とて、ともす火だにもなし。かかる闇き道にま

伴

ひと

しゃば

とき

しんるい

きようだい

さいし

たともなう人もなし。娑婆にある時は親類・兄弟・妻子・

けんぞくあつ

ちち いづく

いころざしたか

はは かな

なさ

眷属集まつて、父は慈しみの 志 高く、母は悲しみの情け

ふか ふさい かいろうどうけつ

ちぎ

たいかい

海老

おな

深く、夫妻は海老同穴の契りとて、大海にあるえびは同じ

ちくしやう

ふさい 契

こま

いつしやういつしよ

伴

く畜生ながら夫妻ちぎり細やかに一生一処にともないて

はな さ

えんおう

ふすま

した

まくら

なら

離れ去ることなきがごとく、鴛鴦の衾の下に枕を並べて

あそ たわむ

なか

か

めいど

たび

ともな

遊び戯るる中なれども、彼の冥途の旅には伴うことなし。

めいめい

ひと

い

たれ

きた

ぜひ

とぶら

冥々として独り行く。誰か来つて是非を訪わんや。あるい

ろうしやうふじやう

さかい

お

さきだ

わか

とど

は老少不定の境なれば、老いたるは先立ち、若きは留ま

じゆんじ

どうり

なげ

なか

おも

る。これは順次の道理なり。歎きの中にも、せめて思い

慰

かた

あ

お

とど

わか

さきだ

なぐさむ方も有りぬべし。老いたるは留まり、若きは先立つ。

されば、恨みの至つて恨めしきは、幼くして親に先立つ子、

歎きの至つて歎かしきは、老いて子を先立つる親なり。か

くのごとく、生死無常、老少不定の境、あだにはかなき世

の中に、ただ昼夜に今生の貯えをのみ思い、朝夕に現世の

業をのみなして、仏をも敬わず法をも信ぜず、無行・無智

にしていたずらに明かし暮らして、閻魔の庁庭に引き迎え

られん時は、何をもつてか資糧として三界の長途を行き、何

をもつて船筏として生死の曠海を渡つて実報・寂光の仏土

に至らんや」と思い、「迷えば夢、覺れば寤。しかじ、夢の

う よ す うつつ さと もと しゆい か やま
憂き世を捨てて寤の覚りを求めんには」と思惟し、彼の山

こ かんねん どこ うえ もうぞう てんどう ちり はら
に籠もつて観念の牀の上に妄想・顛倒の塵を払い、ひとえ

ぶつぼう もと たも たいしやく はる てん みお
に仏法を求め給うところに、帝釈、遥かに天より見下ろし

たま おぼ よう うお こ おお うお
給いて思しめさるる様は、「魚の子は多けれども魚となるは

すく あんらじゆ はな おお 咲 み すく ひと
少なく、菴羅樹の花は多くさけども菓になるは少なし。人も

またかくのごとし。菩提心を発す人は多けれども、退せずし
ぼだいしん おこ ひと おお たい

まこと みち い もの すく ぼんぷ ぼだいしん おお
て実の道に入る者は少なし。すべて凡夫の菩提心は、多く

あくえん 誑 こと 触 うつ 易 よろい
悪縁にたばらかされ、事にふれて移りやすきものなり。鎧を

き つわもの おお いくさ おそ すく
着たる兵者は多けれども、戦に恐れをなさざるは少なきが

ごとし。この人の意を行つて試みばや」と思つて、帝釈、
鬼神の形を現じ、童子の側に立ち給う。

その時、仏世にましまさざれば、雪山童子あまねく

大乘経を求むるに、聞くことあたわず。時に、「諸行は

無常なり。これ生滅の法なり」と云う音、ほのかに聞こゆ。

童子驚き、四方を見給うに人もなし。ただ鬼神近付いて立

ちたり。その形けわしくおそろしくして、頭のかみは炎

のごとく、口の齒は劍のごとく、目を瞋らして雪山童子を

まぼり奉る。これを見るにも恐れず、ひとえに仏法を聞か

んことを喜び、怪しむことなし。譬えは、母を離れたる

仔牛

はは こえ き

こうし、ほのかに母の音を聞きつるがごとし。

「このこと、誰か誦しつるぞ。いまだ残りの語あらん」

たれ じゆ

のこ ことば

とて、あまねく尋ね求むるに、さらに人もなければ、「もし

たず もと

ひと

もこの語は鬼神の説きつるか」と疑えども、「よも、さは

ことば きじん と

うたが

あらじ」と思い、「彼の身は罪報の鬼神の形なり。この偈は

おも

か み

ざいほう

きじん

かたち

げ

ほとけ と たま ことば

仏の説き給える語なり。かかる賤しき鬼神の口より出ず

おも

こと ひと

べからず」とは思えども、また殊に人もなければ、「もし、

ことば なんじ と

この語、汝が説きつるか」と問えば、鬼神答えて云わく

と

きじんこた

い

われ もの い

じき

ひかず へ

う つか

「我に物な云いそ。食せずして日数を経ぬれば、飢え疲れ

しょうねん おぼ

すで 徒 言 い

われ 虚

て正念を覚えす。既にあだごと云いつるならん。我うつけ

こころ つた

し こと

る意にて云えば、知ることあらじ」と答う。

どうじ い

われ はんげ き

なか

つき

童子の云わく「我はこの半偈を聞きつること、半ばなる月

み

なか たま う

に

なんじ

を見るがごとく、半ばなる玉を得るに似たり。たしかに汝

ことば

ねが

のこ げ と たま

宣

が語なり。願わくは、残れる偈を説き給え」とのたもう。

きじん い

なんじ もと さと

き

うち

鬼神の云わく「汝は本より悟りあれば、聞かずとも恨みは

あ

われ いま う

せ

もの い

有るべからず。吾は、今、飢えに責められたれば、物を云う

ちから

われ む もの い

い どうじ

べき力なし。すべて我に向かつて物な云いそ」と云う。童子

な お「物^{もの}を食^くいては説^とかんや」と問^とう。鬼神^{きじん}答^{こた}えて「食^く

ては説^ときてん」と云^いう。童子^{どうじ}悦^{よろこ}んで「さて何物^{なにもの}をか食^{じき}とす

るぞ」と問^とえば、鬼神^{きじん}の云^いわく「汝^{なんじ}さらに問^とうべからず。

これ^きを聞^きいては必^{かなら}ず恐^{おそ}れを成^なさん。また汝^{なんじ}が求^{もと}むべき物^{もの}

にもあらず」と云^いえば、童子^{どうじ}な お責^せめて問^とい給^{たま}わく「その物^{もの}

をとだにも云^いわば、心^{こころ}みにも求^{もと}めん」とのたま^宣えば、鬼神^{きじん}

の云^いわく「我^{われ}は、ただ人^{ひと}の和^{やわ}らかなる肉^{にく}を食^{しょく}し、人^{ひと}のあたた

かなる血^ちを飲^のむ。空^{そら}を飛^とびあまねく求^{もと}むれども、人^{ひと}をば各^{おのおの}

守^{まも}り給^{たま}う仏神^{ぶっしん}ましませば、心^{こころ}に任^{まか}せて殺^{ころ}しがたし。仏神^{ぶっしん}の

す たも しゅじよう ころ 捨て給う衆生を殺して食するなり」と云う。じき い

その時、雪山童子の思い給わく「我、法のために身を捨てとき せつせんどうじ おも たま われ ほう み す

て、この偈を聞き畢わらん」と思つて、「汝が食物ここにげ き お おも なんじ しよくもつ

有り。あ そと もと外に求むべきにあらず。我が身いまだ死せず。その肉にく

あたたかなり。温 わ み ひ我が身いまだ寒えず。その血あたたかなり

ん。ねが のこ げ と たま み なんじ あた願わくは、残りの偈を説き給え。この身を汝に与えん」

と云う。い とき きじん おお いか い たれ なんじ ことば まこと時に鬼神、大いに瞋つて云わく「誰か汝が語を實

とは憑むべき。たの き のち たれ しょうにん ただ聞いて後には誰をか証人として糾さん」と

云う。い せつせんどうじ い み つい し雪山童子の云わく「この身は終に死すべし。いたず

らに死せん命を法のために投げば、きたなくけがらわしき

みす いのち ほう な 穢 汚 ごしよう かなら さと ひら ほとけ 成 しょうみよう

身を捨てて、後生は必ず覚りを開き、仏となり、清妙な

みう かわらけ す ほうき か

る身を受くべし。土器を捨てて宝器に替うるがごとくなる

ぼんてん たいしやく しだいてんのう じつぼう もろもろ ぶつぼさつ みなしようにん

べし。梵天・帝釈・四大天王・十方の諸の仏菩薩を皆証人

われ いっわ 宣

とせん。我さらに偽るべからず」とのたまえり。その時、

きじんすこ やわ なんじ い まこと

鬼神少し和らいで、「もし汝が云うところ実ならば、偈を

と い とき せつせんどうじおお よろこ み き

説かん」と云う。その時、雪山童子大いに悦んで、身に着

しか かわ ぬ ほうぎ し ころべ じ っ たなごころ あ

たる鹿の皮を脱いで法座に敷き、頭を地に付け、掌を合

ひざまず ねが わ のこ

わせ跪き、「ただ願わくは、我がために残りの偈を説き給

え」と云つて、至心に深く敬い給う。さて、法座に登り、鬼神、偈を説いて云わく「生滅滅し已わつて、寂滅を樂となす」。

この時、雪山童子これを聞き、悦び貴み給うこと限りなく、後世までも忘れじと、度々誦して深くその心にぞめ、

「悦ばしきところは、これ仏の説き給えるにも異ならず。

歎かわしきところは、我一人のみ聞いて人のために伝えざ

らんことを」と深く思つて、石の上・壁の面・路の辺の諸木

ごとにこの偈を書き付け、「願わくは、後に来らん人、必ず

この文を見、その義理をさと^{もん}り、実の道に入^{ぎり}れ」と云い畢^覚

わ^{すなわ}つて、即ち高き木に登^{たか}つて、鬼神の前に落^きち給^{のぼ}えり。

いまだ地に至^じらざるに、鬼神、にわか^{いた}に帝釈の形と成^{きじん}つ

て、雪山童子のその身を受け取^みつて、平らかなる所^うにすえ

奉^{たてまつ}つて、恭敬・礼拝して云^{くぎよう}わく「我^{らいはい}しばらく如来の聖教^い

を惜^おしんで、試^{こころ}みに菩薩の心^{ぼさつ}を悩^{こころ}まし奉^{なや}るなり。願^{たてまつ}わ

くは、この罪を許^{つみ}して、後世^{ごせ}には必^{かなら}ず救^{すく}い給^{たま}え」と云^いう。

一切^{いっさい}の天人^{てんにん}また来^{きた}つて「善^よきかな、善^よきかな。実^{まこと}にこれ菩薩^{ぼさつ}

なり」と讃^ほめ給^{たま}う。半偈^{はんげ}のため^みに身^なを投^{じゆうにこう}げて、十二劫^{じゅうにこう}、生死^{しやうじ}

の罪を滅し給えり。このこと涅槃經に見えたり。

つみ めつ たま
ねはんぎょう み
せつせんどうじ いにしえ おも はんげ

しかれば、雪山童子の古を思えば、半偈のためになお

いのち す たも きょう いっぱんいつかん

命を捨て給う。いかにいわんや、この經の一品一卷を

ちようもん おんとか なに ほう

聴聞せん恩徳をや。何をもつてかこれを報ぜん。もつとも

ごせ ねが か せつせんどうじ

後世を願わんには、彼の雪山童子のごとくこそあらまほしく

そうら まこと わ みひん ふせ たから わ

は候え。誠に我が身貧にして布施すべき宝なくば、我が

しんみよう す ぶつぼう う たよ しんみよう す ぶつぼう

身命を捨てて仏法を得べき便りあらば、身命を捨てて仏法

がく

を学すべし。

み さんや ど な

とてもこの身はいたずらに山野の土と成るべし。惜しみ

お

ても何かせん。なに惜おしむとも惜おしみとぐべからず。人久しとひとひさ

ひやくねん

す

あいだ

いっすい

ゆめ

いえども百年には過ぎず。その間のことはただ一睡の夢

う

じんしん

え

しゅつけ

もの

ぞかし。受けがたき人身を得て、たまたま出家せる者も、

ぶつぼう

かく

ほうぼう

もの

せ

ゆげ

ぞうだん

仏法を学し謗法の者を責めずして、いたずらに遊戯・雑談の

あ

く

もの

ほつし

かわ

き

ちくしやう

みして明かし暮らさん者は、法師の皮を着たる畜生なり。

ほつし

な

か

よ

わた

み

やしな

ほつし

法師の名を借りて世を渡り身を養うといえども、法師とな

ぎ

ひと

ほつし

みやうじ

盗

ぬすびと

は

る義は一つもなし。法師という名字をぬすめる盗人なり。恥

おそ

ずべし、恐るべし。

しやくもん

われ

しんみやう

あい

むじやうどう

お

迹門には「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」

説

ほんもん

みずか

しんみよう

お

ねはんぎよう

ととき、本門には「自ら身命を惜しまず」ととき、涅槃經

み

かる

ほう

おも

み

ころ

ほう

ひろ

み

には「身は軽く法は重し。身を死して法を弘む」と見えたり。

ほんじやくりようもん

ねはんぎよう

とも

しんみよう

す

ほう

ひろ

み

本迹両門、涅槃經、共に身命を捨てて法を弘むべしと見え

いまし

そむ

じゆうざい

め

み

たり。これらの禁めを背く重罪は、目には見えざれども、

つ

じごく

お

たと

かんねつ

すがたかたち

積もりて地獄に墮つること、譬えば、寒熱の姿形もなく

まなこ

み

ふゆ

かんきた

そうもく

にんちく

責

なつ

眼には見えざれども、冬は寒来つて草木・人畜をせめ、夏

ねつきた

にんちく

ねつのう

は熱来つて人畜を熱悩せしむるがごとくなるべし。

ざいけ

おんみ

よねん

なんみようほうれんげきよう

しかるに、在家の御身は、ただ余念なく南無妙法蓮華經と

おんとな

そう

くよう

たも

かんじん

そうろう

御唱えありて、僧をも供養し給うが肝心にて候なり。それ

きようもん

ずいきえんぜつ

あ

も、経文のごとくならば、随力演説も有るべきか。

よ なか 物 憂

とき

こんじよう

く

悲

世の中ものうからん時も「今生の苦さえかなしし、いわ

らいせ く

おぼ

なんみようほうれんげきよう

とな

んや来世の苦をや」と思しめしても南無妙法蓮華経と唱え、

よろこ

とき

こんじよう

よろこ

ゆめ

なか

ゆめ

りようぜんじようど

悦ばしからん時も「今生の悦びは夢の中の夢、靈山浄土

よろこ

まこと

よろこ

おぼ

あ

の悦びこそ実の悦びなれ」と思しめし合わせて、また

なんみようほうれんげきよう

とな

たいてん

しゆぎよう

さいごりんじゆう

とき

南無妙法蓮華経と唱え、退転なく修行して最後臨終の時を

ま

ごらん

みようかく

やま

はし

のぼ

しほう

み

待つて御覧ぜよ。妙覚の山に走り登つて四方をきつと見る

おもしろ

ほうかいじやつこうど

るり

じ

ならば、あら面白や、法界寂光土にして、瑠璃をもつて地と

こがね

なわ

やつ

みち

さか

てん

ししゆ

はな降

し、金の縄をもつて八つの道を界えり。天より四種の花ふり、

こくう おんがくき

もろもろ

ぶつぼさつ

じょうらくがじょう

かぜ

虚空に音楽聞こえて、 諸の仏菩薩は常樂我淨の風にそよ

ごらく

けらく

たも

われ

かず

つら

ゆげ

めき、娯樂・快樂し給うぞや。我らもその数に列なりて遊戯

たの

ちか

しんじんよわ

し樂しむべきこと、はや近づけり。信心弱くしては、かかる

ところ

い

い

ふしん

めでたき所に行くべからず、行くべからず。不審のことを

うけたまわ

そうろう

ば、なおなお承るべく候。あなかしこ、あなかしこ。

けんじにねんひのえねじゅうにがつこのか

にちれん

かおう

建治二年丙子十二月九日

日蓮

花押

まつのだのごへんじ

松野殿御返事